

羽村市史編さんだより

平成28年10月

第7号

伸びゆくはむら

特集

段丘のある暮らし

2

- 1 News
- 3 部会の手帖
- 5 市史編さんの足あと
- 5 コラム「ちっとんべえ」



第5回羽村市史編さん委員会を開催

9月30日（金）、市役所で第5回羽村市史編さん委員会が開かれました。会議では、平成28年度上半期の事業の実績や平成28年度下半期の事業計画について報告があり、順調に進んでいることが確認されました。また、平成29年度から刊行予定の資料編について、各委員から意見を伺いました。詳しくは次号でお知らせいたします。

なお、第1期の編さん委員はこの日をもって任期が終了しましたが、各委員とも再任されて、第2期がスタートしました。



▲第5回羽村市史編さん委員会の様子

第2回羽村市史関連講座を行います

山と川と坂と

～羽村市とその周辺の大地の営み～

講師 白井正明さん

羽村市史編さん部会第4部会長

首都大学東京 地理学教室准教授

羽村市史編さん第4部会長として市内外で調査を続ける講師が、羽村周辺の身近な大地に刻まれた物語をひもとき、語ります。見慣れたまちの風景が違って見えてくるかもしれません！

日時 11月26日（土）午後2時～4時

会場 生涯学習センターゆとろぎ 講座室1

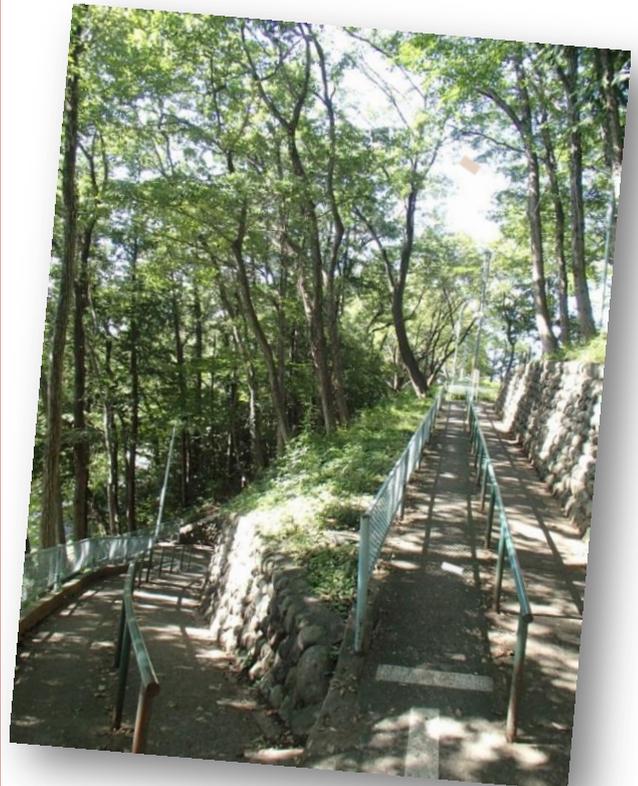
定員 80人

参加費 無料

※直接会場へお越しください

※保育あります

※詳しくは、広報はむら11月1日号をご覧ください



▲小作緑地の坂道



表紙の写真 市内遠望【羽村神社(草花丘陵)から撮影】

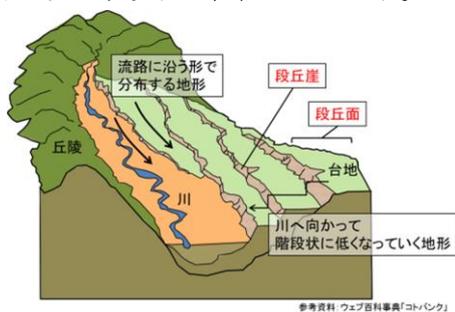
羽村市郷土博物館裏手から草花丘陵を浅間山めざして登って行くと、「羽村神社」（標高約220m）がひっそりと佇んでいます。ここは、まちを一望できる絶好のポイント。

台風通過後の水量豊かな多摩川に、空や木々がくっきりと映し出されています。その先には、崖線に沿って緑地の連なりが幾筋かあるのも見られます。

●段丘と坂

羽村で生活していると、どこへ出かけるにも必ずといっていいほど通過する坂道。駅へ向かう時に、通学路に、または多摩川へ遊びに行く時に…。この普段なにげなく上り下りしている坂道は、昔の多摩川が台地を削った痕跡です。

昔の多摩川は、氾濫するたびに土砂を押し流し、浸食と堆積を繰り返して武蔵野台地の扇状地を形成しました。山地から流れ出した多摩川は、狭山丘陵の南北を削り、氾濫をくり返しながら少しずつ流れを南に変え、現在の位置に至ります。



徐々に低い方へ流れた多摩川が削った跡が、坂として私たちの生活に密着することになりました。市内には多くの坂があり、土地は多摩川へ向かって階段状に低くなっています。車両もなく道路整備も進んでいなかった頃、坂の上の畑へ農作業に出かける際の往来とその苦労は今では想像しかできません。この地形を川がつくった河成段丘とよび、平坦な面を段丘面、その間の坂や崖を段丘崖とよびます。

●段丘と緑地

段丘崖には緑地が残っています。斜面に残る緑地を崖線緑地とよび、このような緑地は流路に沿う形で帯状に残っています。



▲斜面に残る緑地

羽村では羽村神社（草花丘陵）から市街地を眺めると、緑が生い茂る時期には崖線緑地は緑色で彩られ、その位置が一目瞭然です。この緑地を構成する主な樹木は、コナラ、クヌギなどの落葉広葉樹、アカマツ、スギ、ヒノキなどの針葉樹です。緑地には樹高は20m、幹の太さは直径30cmを超える個体も生育しています。

●段丘とその環境

このような緑地は生物観察にはとっておきの環境です。野鳥はもちろん、昆虫、季節の野草まで、さまざまな生物の宝庫です。昆虫採集をするのもよし、見たことのない野草をカメラにおさめるのもよし、図鑑を片手に、子どもは自然とふれあい、大人は童心に帰る…。緑地は私達にそんな豊かなひとときを提供してくれます。

真夏の高温の日でも、緑地内に入るとひんやりとして歩きやすい、なんてことは経験している人も多いことと思います。アスファルトに覆われた道路から一歩踏み込めば、体感温度は明らかに異なります。秋には紅葉する木々が夕日に映えます。季節を感じられる環境が身近なところに残されています。



▲紅葉する小作緑地

●市史編さんの調査

以上のように、自然に着目してみても、羽村には見どころがたくさんあります。すぐ身近にある自然がどのような状況になっているのか、これらを知ることで羽村の魅力の再発見へとつながるのではないのでしょうか。

市史編さん事業では、市内の自然に関する調査を行っていき、自然あふれる羽村の魅力をみなさまにお伝えしていきます。

部会の手帖



各部会の活動の様子を紹介します。

用語の解説

おそき
小曾木村…現在の青梅市小曾木地区周辺にあった村で、昭和30年(1955年)に青梅市に編入された。

通過儀礼…出生・成人・結婚・死など、人生の重要な節目を通過する際に行われる儀式・風習。

第1部会 ～原始・古代・中世～

縄文班では、引き続き市内遺跡出土遺物の再整理作業を行っています。土器の接合状況を中心に各データと照合して、なるべく細かな時間設定を行い、縄文時代の羽村人の生活の様子を明らかにしようと試みています。

中世班の資料調査は佳境を迎え、未調査だった市内の石造供養塔調査に加え、奥多摩町山間部や青梅市内神社の資料などを調査しました。

また、資料に書かれた文字を読み改めてパソコンに入力する作業も進めています。

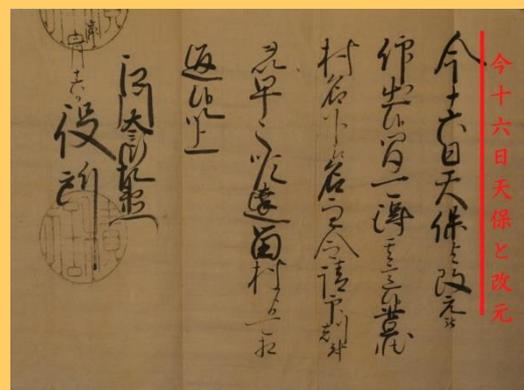


▲市内の石造供養塔の現存状況

第2部会 ～近世～

第2部会では、市内に残されている古文書の調査を継続して行っています。

現在の様な情報伝達技術がない江戸時代において情報伝達のスピードはどの程度だったのでしょうか。写真は領主から各村へ改元したことを通知した史料です。「天保」という元号に改元されたのは12月10日でしたが、実際に村々へ宛てた書類では12月16日になっています。情報を領主が知り、それを通知するまでには多少の時間差があったことがわかります。



▲江戸時代の古文書に残された改元の通知



第3部会 ～近代・現代～

資料編「近現代写真図録編（仮）」の刊行に向けて、市の刊行物に掲載された写真・郷土博物館所蔵の写真・市民の皆様が所蔵している写真の整理を行っています。さらに「近現代資料編（仮）」の刊行も控えているので、引き続き資料の閲覧・情報整理を行っています。資料調査では明治・大正・昭和期に西多摩村と共に西多摩郡に所属していた小曾木村の行政文書も併せて閲覧しながら、近現代の羽村についての調査を進めています。



▲第3部会打合せの様子



第4部会 ～自然～

生態班で行っている樹木の年輪調査では、枯死し伐採された市内のアカマツの切り株を観察しています。これまで観察したマツの樹齢は70～100年ほどであることがわかっています。

地形・地質班は昨年までの比高調査の結果をもとに、離れた段丘面の関係を推定しました。羽村の地形について、多摩川がどのように削ってきたのか検討していきます。

気候班は夏の気象観測を行いました。33℃近い気温を観測したのは夏まつり開始時刻でした。



▲アカマツの切り株

（左側のカメラケース：タテ12cm）



第5部会 ～民俗～

第5部会では、人々の生活の様子や暮らしぶりなどについて、「生業」「信仰」「通過儀礼」「社会組織」「景観」「建物」などの分野に細分して、その実態や移り変わりなどを調査しています。

今夏は、昨年8月と2月に実施した合同聞き取り調査の内容を整理し、改めて個別に聞き取り調査を実施しました。ご協力いただいた方々には大変ありがとうございました。市内での地域性やほかの地域との比較などをしながら、羽村市の特徴を明らかにしていきます。



▲聞き取り調査の様子

（写真は平成28年2月の聞き取り調査）

市史編さんの足あと

※①～⑤は部会の数字です。(例) ① ⇒ 第1部会

月	日	できごと
7月	5日(火)	② 市内史料調査(五ノ神) ※以後定期的に実施
	12日(火)	③ 市外史料調査(一橋大学図書館)
	15日(金)	羽村市史編さんだより 第6号発行
	25日(月)	② 市外史料調査(東京都公文書館)
	27日(水)	③ 市外史料調査(一橋大学図書館)
	28日(木)	① 市内石造供養塔調査 ④ 聞き取り調査(個人宅)
	31日(日)	④ 気温の移動観測・風向風速の観測
8月	4日(木)	② 市外史料調査(東京都公文書館)
	9日(火)	⑤ 市内合宿調査
	10日(水)	⑤ 市内合宿調査

月	日	できごと
8月	16日(火)	① 中世史料調査(奥多摩町) ④ 市内礫層調査
	17日(水)	① 中世史料調査(青梅市)
	24日(水)	③ 市外史料調査(一橋大学図書館)
	31日(水)	③ 市外史料調査(一橋大学図書館)
9月	1日(木)	④ 市内礫層調査
	15日(木)	② 市内史料調査(川崎) ③ 市外史料調査(一橋大学図書館)
	23日(金)	④ 気温観測データ(定点)の回収
	28日(水)	③ 市外史料調査(一橋大学図書館)
	30日(金)	第5回羽村市史編さん委員会

コラム ちっとなべえ

第7回 拓本作業の難しさ “大胆かつ繊細に”

石造物などに刻まれている文字を確認する方法として一般的な拓本。原理は簡単なのですが、やると見るとでは大違い。さっそく始めてみましょう。

表面に乾いた紙を張り付け、霧吹きなどを使って水で湿しながら密着させていきます。表面の凸凹に合わせてうまくやらないと、文字が浮かび上がりません。かといって焦ると水に濡れた紙が破れます。

大きな石碑はいくつかに分割します。1枚目が成功しても2枚目が失敗するなんてことはよくあることです。また、紙が風にあおられてうまく密着してくれないこともあります。

今度はせっかく濡らした紙を乾かします。そうしないと後で墨がきれいに乗らないのです。気が短いと乾く前に墨を打ち始めて、結局失敗することになります。

良く乾いた後、タンポで墨を打ちます。石に刻まれた文字に食い込んでいる部分は白いまま残るので、文字が判読できるのです。

最初から濃く打つと修正がきかないので、薄く薄く全体のバランスを考えながら打っていきませんが、どうしても濃淡ができてしまいます。修行不足を嘆きます。

最後に、紙を石からはがしますが、表面の凸凹に食い込んで乾いているので、無理やりはがすと破れてしまいます。

「大胆かつ繊細に」がキーワードの拓本作業です。(M.M 記)



▲板碑の拓本作業風景

※「ちっとなべえ」とは、羽村の昔ことばで「ちょっと、少しばかり」という意味です。

羽村市史編さんだより

平成29年1月

第8号

伸びゆくはむら

特集

江戸時代のはむら

2

- ① News
- ③ 部会の手帖
- ⑤ 市史編さんの足あと
- ⑤ コラム「ちっとんべえ」

『羽村市史資料編』の体裁固まる

9月30日（金）に開催された第5回羽村市史編さん委員会において、平成29年度以降順次刊行予定の『羽村市史資料編』の体裁等について意見を伺い、その後羽村市史編さん本部において承認されました。資料編はA4版の大きさで、写真や図版はカラー印刷を基本として編集します。平成29年度については、「近現代図録編」「中世編」の刊行を予定しています。

第2期羽村市史編さん委員会委員を紹介します ※各委員とも第1期からの再任です。

職名	氏名	選出区分	備考
委員長	浜田 弘明	学識経験者	第3部会長 桜美林大学教授
副委員長	島田哲一郎	羽村市教育委員会	教育委員会委員
委員	深澤 靖幸	学識経験者	第1部会長 府中市郷土の森博物館学芸係長
	白井 哲哉		第2部会長 筑波大学教授
	白井 正明		第4部会長 首都大学東京准教授
	菊池 健策		第5部会長 元文化庁主任文化財調査官
	白井 裕泰	羽村市文化財保護審議会	文化財保護審議会会長
	宮川 修	羽村市農業委員会	農業委員会会長
	増田 一仁	羽村市商工会	商工会会長
顧問	櫻沢 一昭	—	元羽村市文化財保護審議会会長

第2回羽村市史関連講座を開きました

11月26日（土）、生涯学習センターゆとろぎ講座室1で、第2回羽村市史関連講座「山と川と坂と～羽村市とその周辺の大地の営み～」を開きました。羽村市の地形を特徴づける市西部の坂や山が川の作用と関わってどのようにできたのか、その大地の営みについて、羽村市史編さん部会第4部会長の白井正明さんにお話しいただきました。

羽村市内や周辺をくまなく歩いて得られた地形・地質調査の結果や、数千万年前からのプレートの動きにまでさかのぼった関東周辺の大地の成り立ちなど、ズームイン・ズームアウトを織り交ぜた講師のお話により、多くの参加者が熱心に耳を傾けました。

今後も各部会の活動の成果を講座でお伝えしていきますので、ぜひご参加ください。



表紙の写真 一峰院鐘楼門【羽村市指定有形文化財】

中世、柚保といわれるこの周辺一帯を支配した三田氏の創建とされる、根がらみ前水田を望む龍珠山一峰院。大晦日に除夜の鐘をつきに訪れた方も多いのではないのでしょうか。

江戸時代、多摩川が増水したときには、近隣の村々から玉川上水取水堰の普請の人足を要請するため、この鐘が鳴らされたそうです。

●江戸時代のはむら

江戸時代とは徳川家康が関東に入府し、幕府を開いてから明治維新に至る 260 余年間を指します。現在の羽村市域は当時どのような所だったのでしょうか。知っているようで知らない“はむら”の江戸時代の概観を追っていきます。

羽村市域には当時、現在の住所にも名残のある「羽村」「川崎村」「五ノ神村」の3つの村がありました。「羽村」は現在の「羽東」など羽の付く地区、小作台・栄町・緑ヶ丘・富士見平周辺にあたります。「川崎村」は川崎・神明台・双葉町・玉川周辺、「五ノ神村」は五ノ神・緑ヶ丘・富士見平周辺がそれぞれの村域でした。

江戸時代の村々は幕府や大名・旗本等によって支配されており、羽村・五ノ神村は幕府代官、川崎村は幕府代官及び複数の旗本に治められていました。



当時の村の姿を今に伝える史料に、名主の家に残された「村明細帳」というものがあります。村の人口や戸数、石高（村の生産性を米の収穫量に換算した単位、1石は約1000合）、税の負担や農間稼ぎ（農業の合間に行っていた金銭を得るための仕事）など、様々な情報が記されています。「村明細帳」から3つの村の姿を見ていきましょう。

●村明細帳からみた「羽村」

羽村には江戸時代を通じ、おおよそ 300 戸前後、1200 人ほどが暮らしていました。村の石高は正保年間(1644～1648年)は約 270 石で、宝暦 9 年(1759)には新田分を含み約 981 石と、100 年の間に 3.5 倍以上に増加し、「羽村千石」と称される村に成長します。

多摩川に隣接し、河川の氾濫による田畑の流失を防ぐための普請などの負担はありましたが、漁場を設けて川の恩恵も享受していました。

また、小作緑地辺りは幕府が材木の確保を目的に管理する「御林」があり、松や雑木が立ち並んでいました。

農業の傍ら、男性は薪炭の運搬や日雇い作業を行い、女性は養蚕のほかに紬・木綿を織り、お金を稼いでいました。

●村明細帳からみた「川崎村」

川崎村には、おおよそ 120 戸、500 人ほどが暮らしていました。石高は正保年間には約 280 石、宝暦 11 年(1761)には約 364 石と 1.3 倍に増加しています。

羽村と同様に農業の合間に男性は荷物の運搬、女性は養蚕のほか青梅綿・黒八丈などを織っていたことも記されています。また、多摩川で鮎漁も行われていたようです。

諸商業についての記録も多く、紙や蠟燭などを取り扱う小物商・草履草鞋酒商・馬医者・大工・農具の鍛冶屋などの職業に就いている人の記録が残り、様々な営みがあったことがうかがえます。

●村明細帳からみた「五ノ神村」

五ノ神村は 25 戸ほど、110 人前後が暮らしていました。石高は正保年間が約 5 石で、宝暦 11 年には約 69 石と、14 倍近くに増加しています。五ノ神村は一見すると羽村・川崎村の 2 村と比較して生産性の低い村だったように見えますが、明細帳には「当村ニ水呑百姓ハ無御座候（この村には水呑み百姓はおりません）」と記されており、田畑を持たない貧しい農民はいなかったようです。

他の 2 村と同様に農業の合間に男性は荷物の運搬・日雇い作業、女性は養蚕と織物をし、名産品として青梅綿などの織物が記されています。

また、幕末から明治にかけて村内で商家や酒造業を営む家も存在したことが記されています。



▲江戸時代を担当する第2部会調査風景
(市内旧家にて)

部会の手帖



各部会の活動の様子を紹介します。

用語の解説

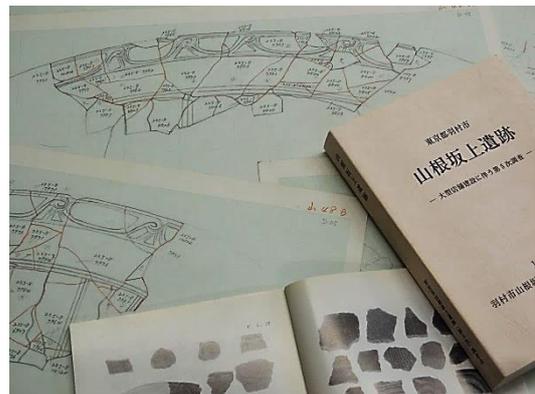
デジタルトレース…図面や実測図をパソコンに取り込み、専用ソフトを使用してトレースすること。デジタルデータにより、編集・補正が容易になる。

筆耕…古文書の原文書を、読み方はそのままに現在の文字に書きおこすこと。

第1部会 ～原始・古代・中世～

縄文班は、引き続き土器の接合関係を整理し、図面と本物の土器の照合を進めています。また、住居址などの図面のデジタルトレースを行いました。基礎的な情報の収集から、その情報の持つ内容の分析へと進行しています。

中世班は、市内に残る石造供養塔と近隣自治体に所在する文書史料の調査がほぼ終了し、資料編の編集に向けて、調査漏れが無いかの確認と内容の詳細な分析作業、筆耕作業を継続しています。



▲調査中の土器の接合関係を示す図面と調査報告書

第2部会 ～近世～

第2部会では、引き続き市内に残されている古文書の調査を進めています。現在は主に旧五ノ神村・旧川崎村の地域を対象に調査を行っています。当時村政を担っていた家からは、各村の村況が記されている古文書や村々の旧景が描かれている絵図など多様な史料が確認できます。

また、資料編の刊行に向けて、これらの調査で発見された個々の史料の内容を把握し分析する作業を行っています。



▲市内旧家に残された史料

第3部会 ～近代・現代～

第3部会では引き続き、羽村のみならず市外図書館及び資料館にも足を運びながら資料調査を進めています。11月に松本神社の絵馬の調査を実施したところ、軍人絵馬や下田製糸の女工絵馬等が奉納されていたことが判明したため、写真撮影を行いました。

さらに同時並行して近現代の羽村についての理解を深めるうえでの聞き取り調査を進め、11月・12月に横田基地や区画整理に関してお話を伺いました。



▲松本神社絵馬撮影風景

第4部会 ～自然～

気候班は11月中旬に秋の観測を行いました。日中はぼかぼかと暖かく、富士見公園では紅葉がまっさかりでした。秋の移動性高気圧に覆われ、観測日和でした。

地形・地質班は、近隣市町村の礫層調査を続けています。冬の本調査を前に調査地点周辺の下見を行いました。

生態班では、9月に続き11月にも市内に出没したイノシシの目撃情報を収集しながら、今後の情報にも注目していきます。



▲庁舎内に設置した定点カメラより草花丘陵を望む

第5部会 ～民俗～

市民の皆様にご協力いただき実施してきた聞き取り調査では、貴重なお話を伺えたことはもちろん、新たな資料の発見も相次いでいます。ご協力ありがとうございました。今後、さらに補充のための聞き取り調査を行い、細かな視点での生活の様子を明らかにしていきます。

また、昭和30年代以降の生活の様子を視覚的に捉えるため、市役所に保管されている古写真を調査しました。懐かしい風景や着ているもの、髪型などから重要な情報を得ることができました。



▲古写真確認作業中の第5部会員



月	日	できごと
平成28年10月	2日(日)	② 郷土博物館収蔵資料調査
	11日(火)	③ 市外史料調査(武蔵村山市)
	12日(水)	④ 礫層調査(昭島市)
	13日(木)	② 市内史料調査(五ノ神) ※以後定期的に実施
	15日(土)	羽村市史編さんだより 第7号発行
	17日(月)	第9回羽村市史編さん本部会議
	18日(火)	③ 聞き取り調査(個人宅)
	19日(水)	③ 市外史料調査(一橋大学図書館) ④ 礫層調査(青梅市)
	23日(日)	① 郷土博物館収蔵資料調査
	27日(木)	① 郷土博物館収蔵資料調査
11月	2日(水)	③ 市外史料調査(一橋大学図書館)
	8日(火)	① 郷土博物館収蔵資料調査
	9日(水)	③ 市外史料調査(一橋大学図書館)

月	日	できごと
11月	13日(日)	④ 気温の移動観測・風向風速の観測
	16日(水)	⑤ 古写真確認調査
	17日(木)	③ 市内資料調査(小作)
	25日(金)	③ 市外史料調査(一橋大学図書館)
	26日(土)	第2回羽村市史関連講座
	30日(水)	② 郷土博物館収蔵資料調査
12月	14日(水)	③ 聞き取り調査(個人)
	15日(木)	③ 市外史料調査(一橋大学図書館)
	19日(月)	④ 気温観測データ(定点)の回収
	21日(水)	① 中世史料調査(青梅市)
	26日(月)	④ 礫層調査(青梅市)
	27日(火)	③ 市役所内書庫公文書保管状況確認

コラム

ちっとんべえ

神社に参拝した際に無病息災や受験合格などを祈願して奉納する絵馬。初詣で絵馬に今年の願い事を書きこんだ人もいるのではないのでしょうか。絵馬を奉納したことはなくても神社の境内に掛けられている光景は目にしたことがあると思います。

このような手のひらサイズの絵馬のみならず、ノートサイズの絵馬、ひいては畳サイズの絵馬まで多種多様の絵馬が神社に奉納されています。また絵馬に描かれている図柄も神社によって異なり、その地域の歴史や風俗が如実に描かれているものが数多く存在します。

例えば、羽村の松本神社の社殿には約130点もの絵馬が奉納されており、そのなかには下田製糸(大正5年操業)の女工と思われる人物や軍服を着用した男性が描かれているものがありました。軍人絵馬の裏面には「昭和拾貳年九月二十九日」と記されており、同年7月に勃発した盧溝橋事件の2か月後に奉納されたことがわ

第8回 「時代を映す絵馬」

かります。中国との全面的な戦争が始まったことで、羽村においても総力戦に向けた地域社会が日増しに形成されつつあったことを示す貴重な資料であるといえるでしょう。

このように絵馬は当時の社会を絵で表現した貴重な資料であるとわかります。歴史の研究手法として、文書資料のみならず、このようなモノの表象からもその時代を読み解くことが出来るのです。これも歴史の面白さといえるでしょう。(R.S 記)



▲左端に軍人が描かれた絵馬

※「ちっとんべえ」とは、羽村の昔ことばで「ちょっと、少しばかり」という意味です。